

ユネスコスクールとしての 2021 年度の活動報告をいたします。

## 自然の中で友だちと力を合わせることを学ぶ

### 1. 本園の概要

本園は、東広島市の広島大学の近くに位置し、園庭のほか園舎の裏に大きな森をかかえている。園児達は日々、裏の森での遊びを楽しんでいる。このような環境の中での本園の教育目標は、「豊かな自然や友達とかかわりながら一人一人がその子らしさを発揮し、共に育ち合う生活を通して心豊かにたくましく生きる力を育む」というものである。令和3年度はこの教育目標に向かって、「心を動かす子どもたちと援助する保育者」というテーマで研究をしている。「自然とのつながり」や「人とのつながり」の直接体験の中で子どもたちが心を動かしながら成長している姿をエピソードに記録し、それに対し保育者の援助を振り返ったり新たな試みをしたりなどして、研究をすすめていっている。

### 2. 本園で大事にしていること

本園では、自然の中で直接体験をしながら自分たちで生活を創っていく中で、様々な感情を豊かに育むことを大事にしている。例えば、自分たちで野菜を育て収穫し食べることを通して自然の厳しさや恵みを感じるとか、園庭や森で出会う生き物や飼育している生き物とのふれ合いを通して命について考えるとか、友だちと葛藤する、折り合いをつける、協力するなどの体験を通して様々な感情を育み、自分を成長させるとか、どうにも抗うことの出来ない自然を目の前に畏敬の念を感じるとか、様々な事象から自分が生かされていることを感じるなどである。これらのことが土台となり、持続可能な社会の担い手となる基盤に繋がっていくと考えている。

### 3. 今年度の事例

今年度の子どもたちの姿をESDの観点から分かりやすく紹介するため、平成 28 年から令和元年に行ったESDの研究で明らかにした 7 種類の構成概念を元に紹介する。7 種類の構成概念とは「受容性・多様性・循環性・有限性・公平性・連携性・責任性」である。なお、幼児の姿はこれらの構成概念がはっきりと分かれているわけではなく、入り交じって見られるということをお含みおきいただきたい。

#### 「木、取ってくる！」

##### (1) 背景

この日は、子どもたち（年長児）が育てて収穫した野菜を使って、クラスでカレーを作って食べる「カレーパーティ」の日であった。A児が、カレーパーティの日が訪れることを、カレンダーを見ながら指折り数えるなど、この日を楽しみにしている子どもたちの様子が見られた。本来であれば、子どもたちが焚き木を集めるなどして、自分たちでカレーパーティの準備をする予定であったが、天候不良による休園により、準備の時間をとることができずにこの日を迎えた。そのため、焚き木などの準備は保育者が行い、当日は、保育者が見守る中、子どもたちがカレーに入れる野菜を切ることとなった。また新型コロナウイルス感染症予防の観点から、保育者がカレーの調理を行い、その間は、子どもたちには自分の好きな遊びをして過ごすように伝えた。多くの子どもたちがそれぞれに好きな遊びを始める中、事例に登場するB児とA児は、保育者が設置した竈のもとへやってくる。

## (2) 実際の様子

子どもたちは園庭へ出て、水遊びをするために森の広場へ出かけたり、虫取り網と虫かごを持って畑へ虫捕りに向かったりするなど、それぞれが好きな遊びを始める。B児とA児、他に数名の子どもたちは、園庭へ出ると、竈に集まる。竈の近くには、担任が焚き木やファイヤーの木（焚き付け用の着火しやすい枝。子どもたちが「ファイヤーの木」と呼ぶ）など、火を起こすための材料を準備していた。B児が担任に「ここでカレー作るの？」と尋ねる。B児の問いに頷きながら、担任は子どもたちに、竈を使って火を起こし、カレーを煮ることを伝える。するとB児は、竈の横に置かれた細い枝やファイヤーの木などを手にし、竈の中へ入れる。その様子を見たA児や他の子どもたちも、B児と同様に木を手にして竈へ入れ、自分達で準備を始める。子どもたちが薪木を入れ終わり、担任が竈に火を入れると、B児らは「おおー」と歓声をあげ、竈の中を覗いたり、近づいて手をかざしてみたりする。



担任がうちわを用意すると、普段から森で焚き火をして過ごしているB児らは、うちわを手にして竈を扇ぐ。しばらくの間、子どもたちは力強くうちわで扇ぎながら、炎を大きくしようとするが、この日がとても暑かったことや、扇ぐことに飽きたり疲れしたりした様子の子どもの数人は、別の遊びに向かう。それでもB児とA児はその場に残り、扇ぎ続ける。

担任は子どもたちが切った野菜を鍋に入れて、竈の上に乗せ、炒め始める。B児とA児は、その様子を覗き込むように見ながら「早く食べたい」と、嬉しそうな笑顔を見せる。

しばらく調理をしていると、焚き木が足りなくなり次第に火力が弱まる。担任が「火が小さくなってきたな」と呟く。するとB児は「木、取ってくる！」と言って、近くにいたA児に「取りに行こ」と声をかけて誘い、2人で森へ駆け出す。しばらくして、焚き木になりそうな木を見つけて戻ってきたB児は、火ばさみを使って竈の中へ入れる。そして2人は再びうちわで扇ぎだす。なかなか火が大きくなり、B児はしゃがんで扇いでみたり、両手でうちわを持って大きく扇いでみたりして、火を大きくしようとする。A児も、汗をかきながら扇ぎ続ける。しかし、なかなか火が大きくなり、B児は「ファイヤーの木がいる（必要）かな」と言う。A児はB児の言葉を聞いて「ファイヤーの木がないと、火が大きくならんよ」と言い、2人は再び森へ駆け出して行く。戻ってきた2人は「1個しか無かった……」と、見つけてきたファイヤーの木を担任に見せる。担任は「ありがとう」と2人に伝え、B児らがファイヤーの木を竈へ入れると、うちわで扇ぐ。B児とA児も同様にうちわで扇いだり、火バサミで焚き木を動かしてみたり、細い枝を拾ってきて加えてみたりしながら、火を大きくしようとしてかかわり続ける。



## 4. 事例からの学び

カレーパーティーを何としても成功させたいというA児とB児の思いがとても伝わってくる事例である。ここまでの思いをもつには、普段の生活で野菜を育てることに意識を向けたり(多様性・循環性・有限性・責任性)、生活に必要な火をつけることを体験していたり(多様性・循環性・有限性)、友だちと折り合いをつけ力を合わせる体験をしていたりする(受容性・公平性・連携性・責任性)ことの積み重ねをみてとれる。これからも子どもたちが自ら生活を創っていく姿を大事に支えていく。